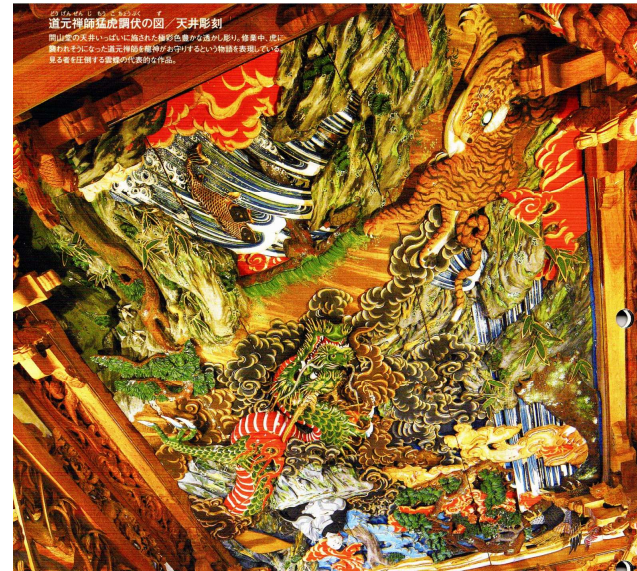




雲蝶とサフランワールド

1. 雲蝶彫刻の創作の根源
2. 雲蝶の彫刻、サフラン酒の鰻絵、造園
3. サフラン酒の羊、戌の類似

1. 雲蝶彫刻の創作の根源



幕末の木彫りの名匠・石川雲蝶の手になる、見事な「仁王像、そして道元と猛虎の大彫刻」が魚沼・西福寺に納められました。(施主は方丈の大瀧和尚)

西福寺と開山堂

西福寺は、芳室祖春(ほうしつそしゅん)大和尚によって開かれ、約500年の歴史をもつ。本尊は阿弥陀如来三尊で、鎌倉時代の作。本来、曹洞宗では釈迦如来を本尊するが、西福寺は初め天台宗の寺であり、その後、本尊阿弥陀如来そのまま受け継いで曹洞宗に改宗し、800年以上護寺してきた。

開山堂は、初代住職をまつる堂のことで、西福寺では開山芳室祖春大和尚と曹洞宗の開祖である道元禪師が中央に、そしてその周りには歴代住職がまつられている。この開山堂を建立し、構図を決めて石川雲蝶に彫刻の装飾を施させたのが、第23代住職、蟠谷大龍(ばんおくだいりゅう)和尚で33歳の若い住職。嘉永5年(1852)起工、安政4年(1857)に完成した。しかし、歳の若い住職が貧しい農村地域に宗教性芸術性の高いお堂を作るにあたっては困難が多く、人々は様々な考えを持つなか、立派な開山堂が完成すると、地域の人々は喜ぶ一方で寺ばかりが贅沢をしているという心無い噂も広がった。大龍はそんな不穏な状況を自分が身を引くことで打開しようと考え、開山堂の落慶式(安政4年)に導師となることなく住職の座を退き、隠居として他寺へと移った。

蟠谷大龍和尚と雲蝶

大龍は、この雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所となるお堂を建てたいという前住職の志を引き継ぎ、お釈迦様や道元様の教えこそが人々の心を豊かで幸せに導いて下さると信じて、是非この開山堂にも道元様の世界を再現したいと考えた。そこで、すでに三条に入り、本成寺や栃尾の貴渡神社に彫刻を施し活躍しているのうわさを知り、この魚沼に招き入れた。雲蝶39歳の時です。歳の近い二人はすぐに意気投合、開山堂にかける熱き仏道心を大龍様が語れば、雲蝶はその思いをよく理解し、彫刻という形にして見事に表現。

最初の作品である洪水を鎮める「仁王像」一対。

ついで、近隣の、何も楽しみのない貧しい生活に頑張っている住民に、何か慰めになれば、と開山堂全体を装飾する大彫刻群。

雲蝶にとってもこれだけの大きな仕事を一人でするのは初めてで、大龍の大きな信頼のもとに思う存分仕事をし、雲蝶の人生に大きな影響を与えた。

何のために作成されたか、という観点で考えますと……。

仁王様と仏法護持の大きな木彫の製作は、西福寺方丈の大瀧和尚による、洪水を鎮め、豪雪や冷夏にも苦しむ住民を慰めようという発願で、はじめられたと云われています。

機那サフラン酒の創業者、吉澤仁太郎は、この魚沼の西福寺を再三訪問したと伝えられています。もしかしたら仁太郎にも、大瀧和尚と同じ気持ちがあったのでは、ないでしょうか。

西福寺の大きな木彫を見て、仁太郎は、はたと気づいたと思うのです。

『みんなに楽しんでもらえるものを、作ってあげたい。』

西福寺の図も、よく見ますと、一番大きく描かれているのは「龍」です。長岡摂田屋、サフラン酒の創業者の吉澤仁太郎は、龍に特別の想いを持っていたようです。私も、単なる火防やお守りのみならず、仏法の守護、そして人々の心を豊かで幸せにという強い祈りが、鬼瓦をはじめ、龍、あるいは龍を暗示させる図像を屋敷内のあちことに配置したのでは、という側に立ちたいと思います。仁太郎の鰻絵の図も、雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所として、「暗く重たい冬への反発」ではと、思いやりの心で表現される研究者がおられます(*1)。確かにそうです。屋敷の周囲に住む、日々の厳しい暮らしに生きる人々への、仁太郎の、心からの励ましと日頃の協力への感謝のように思えるのですが、如何でしょうか。

今から百年前、長岡の片田舎で薬種製造を生業とした仁太郎さん、酒作りの繁忙期には、周辺の村人の手を借りざるを得なかったでしょう。村と一緒になければ、事業は成り立たない。そんな時代です。

冷夏や洪水に悩まされつつ、農業に精出す周辺住民に、日頃から世話になっている仁太郎さんも、はたと気づいたと思うのです。

『みんな、いつも苦勞しているなあ。頑張ってるなあ。でも娯楽と云えるものは、なにひとつない。せめて、みんなが楽しめるようなものを、作ってあげたい。』



～ 共同体を守り、感謝する精神、今風にいえば、「町づくり、村づくりの心」かも知れません。

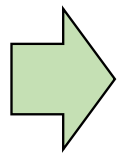
近隣住民の、当時の厳しい生活。

毎冬の豪雪

冷夏での不作、凶作

度重なる洪水

それらを片時でも忘れさせるような
娯楽もない。



世話になっている近隣の住民に、
『鰻絵』で、励ましと元気づけをしたい。

今から百年前、長岡の片田舎で薬種製造を生業とした仁太郎さん、原料搬入や酒作りの繁忙期には、周辺の村人の手を借りざるを得なかったでしょう。村と一緒になければ、事業は成り立たない。そんな時代です。

たびたびの冷夏や洪水に悩まされつつ、農業に精出す周辺住民に、日頃から世話になっている仁太郎さんも、はたと気づいたと思うのです。『みんな、いつも苦労しているなあ。頑張ってるなあ。でも娯楽と云えるものは、なにひとつない。せめて皆がひと時でも楽しめるようなものを、作ってあげたい。』



～ 共同体を守り、感謝する精神、今風にいえば、「町づくり、村づくりの心」かも知れません。

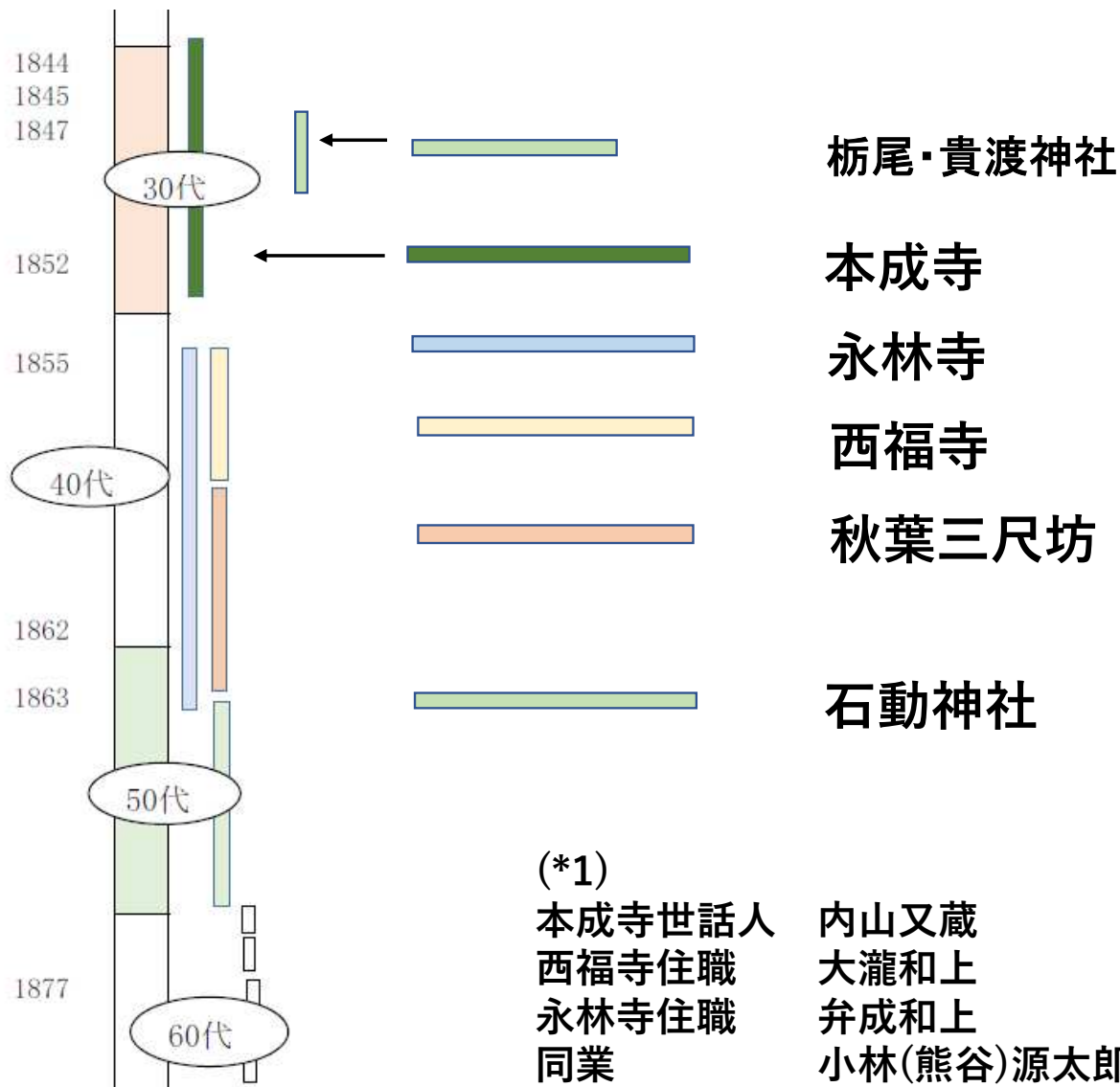
頑張っている近隣の住民に、
『鰻絵』で、励ましと元気づけをしたい。
～ 魚沼・西福寺の巨大彫刻と同じでは

2. 雲蝶の彫刻、サフラン酒の鰻絵、造園

多くを拝観していませんが、雲蝶の彫刻には、いつも複数のコンセプト複数のコンセプトがあるように感じます。

その感覚は、サフラン酒でも、同なのですが、こちらは施主ともいえる、主人の吉澤仁太郎の意思だと思います。

雲蝶の彫刻の場合、施主が雲蝶の類稀な技に惚れ込み、もうひとつのコンセプトを望んだのか、あるいは彫師雲蝶の、元々の意思なのか、わかりません。でも気になっています。



中心人物(*1)との対面
いつ、どのように

依頼の受け方
本人の気持ち

仕事の進め方

それぞれに
ストーリー

三寺院の彫り物の主題、目的(恐らく、というレベル)
依頼主により、少しずつ異なっている

本成寺
塔頭の向拝に見られる、寺院の荘厳
～そのほかに何か、あった筈

西福寺
住民の幸せを祈り、仏法をひろめよう
始めの仁王 洪水禍を鎮めるための祈願
道元の図 苦しい生活の住民に与楽の祈願

永林寺
お浄土を本堂に再現
始めの天女の浄土は、光長らに対する慰霊
本堂と廊下の境に龍や麒麟で仏を守護
～そのほかに何か、ある筈

サフラン酒の鍔絵蔵の意匠の意図は

招福・魔除け	祈りと感謝
地域安寧	五穀豊穡

五行説・五大思想
世界の構成要素

十干十二支
農耕、勤労の奨励

空間の把握

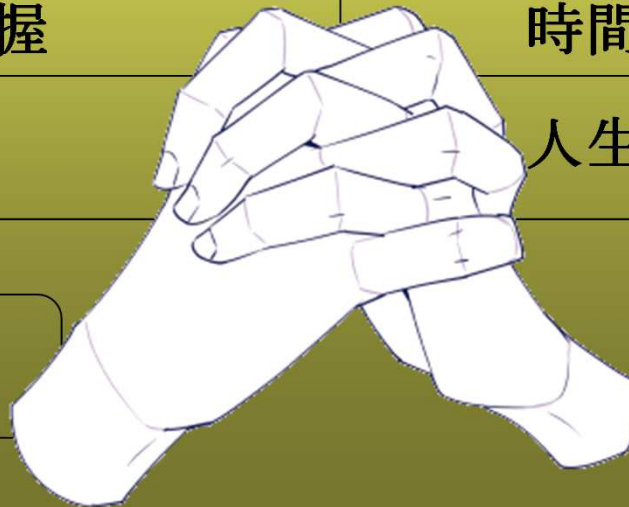
時間・次元の把握

世界観

人生観

四神・四霊

十二支



仁太郎ワールドの二面性

遊びと奉仕の
テーマパーク

さまざまな守護神

「招福・魔除け、五穀豊穰、
商売繁盛、子孫繁栄」

「地域の安寧」

人々に日々の喜びを
もたらす祈り

祈りと感謝の
テーマパーク

さまざまな結界

「四神・四霊と十二支」

如来の「昇り龍・降り龍」

「薬師如来」への誓い

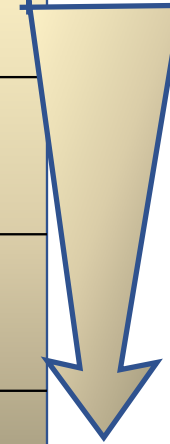
仁太郎の世界観、人生観

娯楽、激励への喜び

驚き・美の堪能

謎解きの楽しさ

祈りと感謝の発見



サフラン酒では、まず『美』で驚かせ。
次に、ありとあらゆる『謎解き』満載。

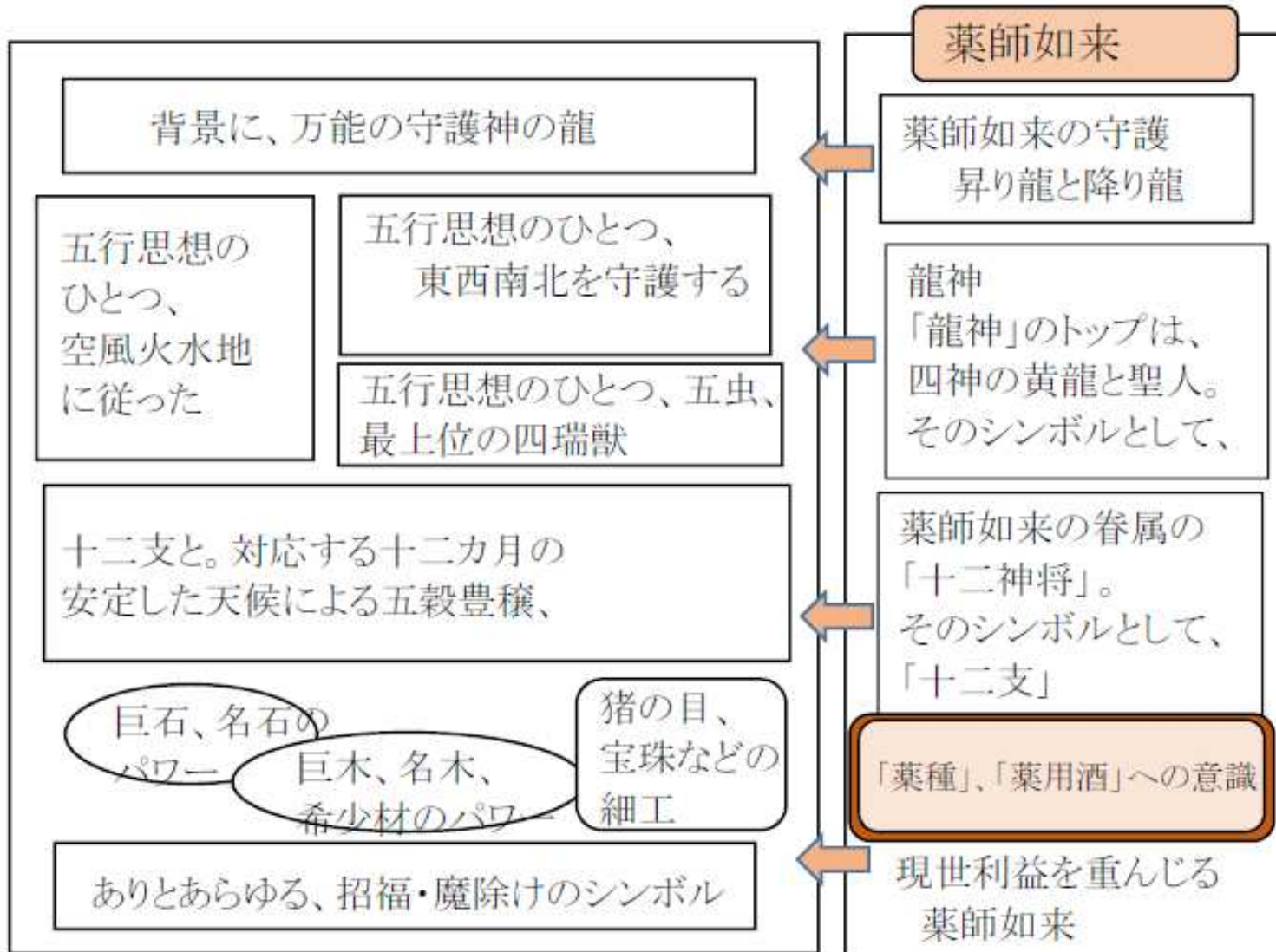
それを解くと、『祈りと感謝』が見えてくる。

細かなところを見ていきますと、このような複数コンセプトが現れてきます。

考えれば考えるほど、他との関連に気づくに従って、そうに違いないと思えてきます。

そこがサフラン酒の、もうひとつの魅力かも知れません。

仁太郎ワールドの全体像仮説



私は、サフラン酒創業者の吉澤仁太郎氏は、
大変な教養人だったと思っています。
最近は、この見方に賛意を示す人が増えてますが、
しかし単なる「金持ち道楽」、と評価する人も
またまだ、いらっしゃいます。
これらの評価は、両極端です。この両極端とも
云うべきゲストの印象が何故生まれたか、について、
いろいろと考えました。

そして、仁太郎さんが創造した世界、仁太郎ワールド
は、元来二面性をもつテーマパークともいうべきもので、
うっかりして読み違えると、このような誤解を生じる
ことになりがちということに気づきました。

仁太郎ワールドの二面性

○ 表面の姿として、「遊びと奉仕」

仁太郎さんの趣味と、
顧客や訪問者への、奉仕(おもてなし)

～ 成金趣味と見られたか

○ 隠れている姿として、「祈りと感謝」

仁太郎さんの信仰、祈り、人生観のベースとして、
薬師如来、龍、そして四神・四霊と十二支への
祈りと感謝

～ 表面に表れない、祈り

西福寺の雲蝶彫刻の二面性

旧山門	仁王像	洪水禍を鎮めるための祈願
開山堂	道元の図、 夥しい欄間彫刻	弘法とともに、苦しい生活の 住民に与楽の祈願 テーマパーク

3. サフラン酒の羊、戌の類似

長岡南部・摂田屋のサフラン酒本舗の鰻絵、
おかしな形の羊、戌の疑問

サフラン酒本舗の羊、戌が、長岡市栃堀の貴渡神社(たかのり)の
「十二支の彫刻と酷似している」のに気づきました。

この彫刻は、石川雲蝶の作。

サフラン創業者の吉澤仁太郎、左官の河上伊吉は、
魚沼の西福寺の諸作品を見に、何度も訪問したと云います。
西福寺のみならず、近在の雲蝶さんの彫刻も、見て回ったのでは
ないか、というのが、私の仮説です。

今回、拝観させていただき、完全に疑問が解決したということはないですが、そのすばらしさに驚きばかりでした。

吉澤仁太郎、左官の河上伊吉が、いくつかの十二支の形を手本にしたいと思ったと云うより、これらの十二支をどう感じたが、知りたくなりました。



貴渡神社
の羊、戌
(石川雲蝶)



木原尚, "越後の
名匠 石川雲蝶",
新潟日報事業社
(2010)



サフラン酒
の羊、戌

